2018.9.20

人に、自然に、やさしい地域づくりを目指して

和と風と

社会福祉法人　潤沢会
ワークステーション湯田・沢内
〒029-5612
岩手県和賀郡西和賀町沢内字大野13-28-4
TEL0197-85-2019　FAX0197-81-2015
編集人／髙　橋　和　也
発行人／坂　巻　　熙
印　刷／鶴田印刷株式会社

No.64

元気一番館開所準備進む

「微助人の家」2階の工事が終了し、9月15日（土）引渡しがされました。この日は、理事と監事合計9名と職員3名でミニ内覧会も開催。新たな地域福祉の拠点完成に、皆で喜びを分かち合いました。

様々な活動を可能にする「清水ホール」

障がい者の就労の場、訓練の場、健康維持、増進の場としてスタートした微助人の家「元気一番館計画」。2階部分の工事と平行し、理事・監事・職員の合同検討会も定期的に開催。

障がい者だけでなく、誰もが気軽に利用できる地域福祉の拠点の場についても話し合われています。

元気高齢者を増やそう

まず始めに取り組むのが障がい者と高齢者の健康維持、増進です。西和賀町の高齢化率は約47％。とは言っても、大規模に農業をしている人、地域のリーダー的役割を担っている人、各種スポーツ、趣味活動に取り組んでいる人など、現役バリバリの高齢者がたくさんいます。こういった人たちが集まり、気軽に体力作りや友達作り、趣味活動の場として活用していただき、健康維持、増進を図っていただくことが狙いです。まずは、現在町内に30団体ある老人クラブと当施設利用者とのタイアップ事業を町社会福祉協議会と計画中です。

地域組織の衰退に歯止めを

老人クラブの会員減が全国的に課題となっています。この背景には、現役で働く高齢者が増えたことや、共通の価値観を持った人たちが集まり、活動しやすい環境が増えたなどが挙げられています。また、地域との関わりを煩わしいという人も。西和賀町も会員が減少傾向にあるそうです。しかし、高齢化、過疎化が進む同町では一人暮らし高齢者も増えており、突然の災害等を考えても、こういった地域組織は重要な役割を担っています。元気一番館を活用し、そういった地域組織の衰退に歯止めをかける一端を担えればと思っています。

魅力ある活動場所に

そもそも魅力ある活動場所でなければ誰も利用しません。魅力化の一環として、町の図書室（約5，000冊）、当法人事業の「おもちゃ図書館」も移す予定です。また、健康器具やインターネット環境も整え、どの年齢層も利用できるよう計画しています。さらに、老人クラブとのタイアップ事業では、公共交通機関が少ないことも課題とし、当事業所の送迎車を活用できないかも合わせて検討しています。

障がい者の仕事の場にも

健康器具、図書、インターネットなど、元気一番館の機能は障がい者が利用する場としても適しています。また、掃除や図書の整理などは、働く障がい者の新たな仕事にしていく計画です。元気一番館を利用することで、高齢者や子供、障がい者が関わりを持ちながら支え合い、相互理解を深められる場にしていきたいと思っています。

高橋　和也

「障害者があっても、ここで暮らしたい」を支えるために…

～グループホームの現状と課題～

一人ひとりに必要な支援が求められます

障害者総合支援法での共同生活援助（グループホーム）とは、「地域での少人数の共同生活を支援するサービス」となっています。

当法人では平成十五年六月から平成二九年二月までの間に、町内4ヶ所のグループホームを整備しました。定員22名に対し、現在の利用者は21名。

サービスの内容は、障がいのある方に対して、主に夜間において、共同生活を営む住居で相談、入浴、排せつまたは食事の介護、その他の日常生活上の援助を行います。

このサービスでは、孤立の防止、生活への不安の軽減、共同生活による身体・精神状態の安定などが期待されます。

障がいの種別も、身体・知的・精神で平均年齢57歳。最高齢者84歳、最年少者35歳。難病やてんかん、特定疾病（人工透析など）、を抱えている方、発達障害により障害特性の強い方、幻聴・妄想が時折出現する方など、配慮の必要な支援のあり方に困難さを感じることは多々あります。日々、暮らしを共にする18人のグループホームスタッフは、健康面や行動面の観察、家族や事業所、スタッフ間での情報の共有と相談を欠かしません。

食事作り、排泄のお世話、入浴介助など身の回りのことから、悩みごと相談にものります。夜間の不調、救急搬送や泥酔、いつもはみられない特異な行動、徘徊、そして、居たはずの利用者の姿が見えなくなるなど緊急事態の対応も。時には、突発的な粗暴行為もありました。また、末期癌の方を、亡くなる1週間前までホームでお世話出来、そこから得たものは大きな経験となっています。

利用者7人の方（全体の1／3）に、戻る家がありません。親が亡くなるなどの理由から一人暮らしがままならくなっての利用です。

グループホーム利用者も障がいの多様化と高齢化が進み、介助の度合いの高まりと意思疎通の困難さもみられ、スタッフのスキルアップも求められています。そこで、研修会への参加、外部講師を招いてのスタッフ研修会や定期会議を通し、疾病や障がいの特性を学び理解を深め、支援スキルの向上に努めているところです。

人（利用者）と人（支援者）の関係づくりを基に、個の尊重を大切に考え、虐待を引き起こさぬことを念頭におき支援にあたっています。

彼らが望む地域での暮らしを交えていくことは、容易な事ではありません。サービスの目的である孤立の防止、生活への不安の軽減、共同生活による身体・精神状態の安定などを心がけ、一人一人の希望にできるだけ添うよう配慮しています。また、短期入所は2ヶ所で4人の受け入れを行っています。

グループホーム利用料は、18歳以上の場合は利用者とその配偶者の所得。ただし、月額上限よりもサービスに係る費用の1割の金額の方が低い場合には、その金額を支払います。その他に、食材費、高熱水費、居住費などについての実費負担（当事業所の場合4万5千円～5万5千円）があります。

施設長補佐　高橋　育子

今年も国際ボランティアNICEと交流

今年もNICEが西和賀町の大野地区を拠点に活動しました。その一環で毎年当事業所も訪れてくださいます。今回はそのメンバーから感想をいただきましたので、ご紹介いたします。

NICEは、日本、アジアで国際ワークキャンプを主催するNGOです。国際ワークキャンプとは、世界中の若者が地域の人達とともにボランティア活動に取り組む国際協力プログラムで、毎年たくさんの若者が世界中に派遣され、ボランティアとして人々の手助けをしたり、地域を盛り上げたりしながら活動しています。

今回のプログラムでは参加者は日本人4人、トルコ人2人、メキシコ人1人、香港人1人の計8人で、8月22日～31日までの10日間、西和賀町の農作業のお手伝いやビオトープ作りなどをメインに活動。その他にも、今回のワークステーション訪問や保育園訪問など、様々な分野の体験をさせていただきました。西和賀町は自然が豊かで食べ物も美味しく、何より地元の方がとても温かく私たちを歓迎して下さったことがとても印象的でした。今回のワークステーション訪問では、午前中に利用者の方との農作業体験、午後にはみなさんと色々なゲームをし、楽しい時間を過ごさせていただきました。以下は、今回お邪魔させていただいたメンバーからの、ワークステーション訪問を終えての感想の一部です。

トルコ人女性

私はトルコでも障がい者の方々との交流を行っています。今回の経験は私のトルコでの活動と通じるところもあり、とてもいい経験となりました。みなさんとても親切で気さくで、またワークステーションの設備は障がい者の方々が日常的に積極的に作業をされる場所として素晴らしいと思いました。

メキシコ人女性

メキシコではまだあまり障がい者の方々と助け合って生活をするという考え方が浸透していないので、今回このワークステーションを見たときには驚きました。この場所の機能を理解し、私の国での福祉施設の向上に貢献していきたいと感じました。

今回のワークステーション訪問での利用者の方々との交流を通して、メンバー全員が様々なことを学びました。今回の訪問は私たちにとって貴重な経験となりましたし、利用者の方々にとっても、私たちとの交流が楽しい思い出となって心に残っていれば嬉しく思います。

NICE国際ワークキャンプ
リーダー 内本 穂波

お箸で豆を移すゲームは特に盛り上がりました

「風声」

理事長
淑徳大学名誉教授
毎日新聞名誉職員
坂巻熙

死に方の自己決定

暑かっただろう。苦しかっただろう。人生の最後を、狭い病室のベッドで終えた人のことを思うと、言葉もない。ご存知、岐阜の病院で、エアコンが故障し4人の高齢者が熱中症の疑いで死亡した出来事だ。一年前に脳梗塞で入院した僕。同世代だし他人事とは思えないのだ。

モーレツに暑かった今年の夏。豪雪の地西和賀はエアコン不要。夏は扇風機で十分だったのに、今夏は冷房付きのグループホームがうらやましい気分。ホント暑かった。

所沢の家では一日中エアコン漬け。原発に反対しながら、「高齢者は、ためらわずエアコンを」をとTVの解説に、「ま、いいか」と我ながら情けない。

いまは八割以上の人が病院で死ぬ時代だ。昔はその逆。大方は自宅で最後の迎えだ。

父が脳出血で亡くなったのは、僕が中学生の時だ。倒れて数日間、苦しげな息づかいがフッ、と途切れ、往診の医師が「ご臨終です」子供心に、命のはかなさ、父との思い出の数々に涙があふれた。唇をガーゼで濡らして〝末期の水〟。父との別れに心が震えた。

人は、必ず死ぬのである。

平均寿命を超え、いつ〝お迎え〟が来てもおかしくない僕。どこで、どのように再期を迎えるか。身の回りの整理も含め、考えておかなばなるまい。

終末期医療の在り方も、社会全体で見直す必要があるだろう。人生の終わりに掛かる高額な医療費。〝高齢者大量死時代〟が来たら、いまの医療保険制度は、間違いなくパンクするだろう。

そこで僕。①自宅で死にたい②手術など体に負担はかかることはしない③痛い思いはやめてほしい④機械につながれた延命治療、スパゲティ症候群は拒否⑤口から飲食が出来なければそれで終わり⑥延命のための医療はしない。

これが親父の〝死に方の自己決定〟（リビング・ウィル）だ、と息子に話したら、こう言うのです。

「オヤジには年金があるから簡単には死なせません。病院も、終末期は医療費が稼げるから、なかなか死なせてくれないよ」

会員の声を大切に

会員の皆さまから寄せられたアンケートはがき

「ユリや西ワラビが最高でした」「山菜の追加注文を期待します」これは、年会費2万円で年4回、当事業所製品や地域の特産品などを発送する「ふるさと宅急便」への感想。送った品はもちろん、当事業所への応援、大雪の心配など、気持ちのこもったお言葉をたくさん頂戴しています。

前号の広報紙「和と風と」1ページに載せさせていただいた送料値上げ。一般的に考えれば、会員様はお客様です。高いと感じれば買わない。お得と感じれば買う。送料なんて自助努力でどうにかしろと言われて当然です。

しかし、会員様からは、「選択制にしてはどうか」「年会費をあげてはどうか」「発送回数を減らしてはどうか」「会費値上げはしないでほしい」「品物を減らしてはどうか」等々、継続的に応援していく、繋がっていくにはどうしたら良いかを一緒になって考えてくださっているのです。

会員の皆様の声を大切にし、ふるさと宅急便の目的、役割、原点を再確認する時期なのだと感じています。

高橋　和也

和太鼓を通して

利用者・職員によるワークステーション和太鼓チームが今年で6年目を迎えました。施設開設10周年記念公演で披露するために結成され、その場限りのものと思っていました。しかし、利用者の強い希望もあり、現在も継続しているところです。メンバーの入れ替わりは多少ありましたが、現在は利用者9名、職員4名の計13名で活動しています。主に雪に閉ざされる冬場を練習期間にあて、町の福祉まつりや、特養でのお祭り、施設行事などで披露しています。

指導いただいている「さわうち太鼓百年座」が今年で創立30周年を迎え、先日その記念公演が開催されました。かなりの大舞台です。今のレベルで出演しても失礼にあたる。冬場の練習には熱がこもりました。直前の1ヶ月は夜間練習も入れました。特養でのお祭りにも2回出演し場数も踏みました。いざ、本番！観客からも良かったよ、と声を掛けられるくらいすばらしい出来でした！

うまくいった時の達成感、人前に出る緊張感、普段の生活では味わえないことが、和太鼓を通し利用者自身が感じています。この自信が、今後の人生に少しでもプラスになってくれればと思います。

11月には新たに、障がい者施設和太鼓交流会を企画しています。和太鼓を通し、施設間、利用者間の交流を深めていければと思います。また、練習の日々が・・・（笑）

事務長　高橋　健一

新調した衣装で見た目もバッチリな太鼓チーム

利用者へのいい刺激に

生憎の雨で室内での焼き肉パーティ

「地域活動支援センターとんがりぼうし」。8月から名称を改め、余暇活動を中心に、月2回、日曜日を活用して社会参加の場を提供しています。北上地区では「萩の里」「楽楽」が活動しており、今年度から3センターでの交流事業を活動内容に組み込んでいます。春先には北上でボーリング交流会を実施、そして今回、西和賀で焼肉交流会を実施しました。

大雨の1日で室内での焼肉交流会となってしまいましたが、みんなお腹いっぱい大満足。そのお腹をへこませるため、午後はミニ運動会。大いに盛り上がりました。

単独ではどうしても活動内容がマンネリ化してしまうのはどのセンターも一緒。年に数回、交流会をすることで利用者へのいい刺激になればと考えています。さて、来年の交流会は何にしようかな？

事務長　高橋　健一

喜寿のハッピートーク No.32

久しぶりに会ったS子は、ショートヘアーにピンクのTシャツ。明るい生き生きした表情。3年前お連れ合いを亡くし、一人暮らしのはずなのに…まさかの再婚？はたまた同棲？

ただならぬあの艶っぽさは誰かがるゾと探りを入れる私。

料理教室に通っている。時々友だち招いてお味見会をしている。と言うのです。「ワインの酔いも手伝ってか、美味しい！エプロン姿が可愛い！なんて褒めてくれるの。長いこと褒められていないので、ドキドキするほど新鮮なフィーリングよ」。

「スーパーのお惣菜の晩ご飯。文句つければ自分で作れば、と妻。」「いつもパジャマでごろごろしている夫にあきあき。」などとストレスを吐きあう客人を見ていると、なんとなく嬉しくなるのは一人身だからかしら、と幸せな気分で、ときめきながら、レシピを考え、おしゃれして好きな客人を待つという、70代老女S子の幸せそうな顔。

手紙、電話、メールもいつの間にか減り、外出も億劫になり、認知症が迫って来る恐怖に怯えるこの世代。

誰かと繋がり、会話をし、スキンシップを持つことは、心身を健康に楽しくしてくれる幸せホルモンのオキシトシンが分泌されるとか。人は誰かに恋をしたり、ときめいている間は脳は老いない。だからボケ無いそうです。

そうか、料理の下手な私はスキンシップにしよう。と言ったら、やたら抱きついたら、それこそ認知症と言われるぞ。と冷たく我が連れ合い。

相談役　坂巻　潤子

やっぱり運動会は楽しい!!
～北上・西和賀地区合同ふれあい運動会～

運動会の定番「玉入れ」も白熱しました

9月1日㈯、北上・西和賀地区合同ふれあい運動会が行われました。ワークステーションは赤と白に分かれての参加。数日前から、「うちらが勝つんだからね！」と早くも臨戦態勢!?と思えば、「足、痛てぇな」と心配する利用者も。

本番当日。みんな一生懸命に走ったり、投げたり…。それを見て、競技に出ていない利用者も「ガンバレ～！」と応援。歩行器を使っている利用者も順番が来れば、歩行器を置いて走る！見ているこっちがビックリ!!

結果は白組勝利。ただ、結果よりもどの利用者も表情が良かったのが印象的だった今回。筋肉痛になった利用者もいたようですが、「楽しかった～」の一言にほっと一安心です。

千葉　伶奈

パン製造復活!!

病院カフェ～風～でお待ちしておりまぁ～す。

「パンはいかがですか？」西和賀町立病院内の「カフェ～風～」で久々に響いたこの言葉。

職員体制の都合で一時休止していたパン製造が、復活しています。現在は金曜日のみの販売ですが、お客様からは「やっと再開したのね」「このパンが食べたかった」と、大変喜んでいただいております。また、毎週月曜日は福田パンも販売しています。いまや盛岡名物の一つにもなっており、「福田パンをここで買えるなんて」と、これまた喜んでいただいております。月曜と金曜はパンの日と覚えていただき、是非お買い求めください。

高橋　和也

新職員紹介

今川　美和

7月からパン工房を担当しております。皆様からの「美味しかったよ」が、とても嬉しく励みになっております。

北上市から週3回通っておりますが、これからは、紅葉を見ながら一時間の通勤を楽しみたいと思っております。よろしくお願い致します。

高橋　悦子

8月からパン工房でお世話になっております。今はパン作りの基礎を教えて頂いているところです。

まだまだ覚えることだらけですが、おいしいパンを焼くことができるように頑張ります。どうぞよろしくお願い致します。

柏崎　優子

8月から配食サービスの調理員として働いております。数年ぶりの就労には充実感がありますが、家庭以外での調理経験がないうえ、何分不器用な私。その日の仕事をこなすことで手いっぱいです。言うまでもなく、同僚の皆さんには面倒かけっぱなしです。とにかく無理せずに頑張ろうと思います。

地域トピックス

障がい者雇用の水増し問題

障がい者の社会参加、雇用の促進を進めているワークステーション湯田・沢内にとって、中央省庁が障がい者雇用割合を42年間にわたって水増ししていた事実を知り大変驚かされました。法定雇用率2・3％（昨年度末まで）を上回る2・49％の雇用だと発表していたものが、再調査したら1・19％しか雇用していなかったのです。3460人の水増しなのです。つまりこの数、障がい者の仕事が奪われたことになります。しかし、罰則規定はありません。企業には法定雇用率2・0％（昨年度末まで）を達成できない場合は納付金が課せられます。公的機関が見本を示すので企業も頑張ってくださいという趣旨だと思います。その見本が揺らいでいるのです。障がい者や関係者の間に衝撃と落胆が広がっています。

岩手労働局が昨年12月に発表した岩手県内の状況では、民間企業の実雇用率は2・16％、市町村は2・39％となっています。どちらも法定雇用率をクリアしています。西和賀町は3・14％で県内上位です。3％を超えているのは5市町村あります（現在再調査中で数字に変化も予想されます）。

この「障がい者雇用の水増し問題」を契機に、障がい者の差別を無くし、雇用を広げ、障がいを持っても自立できる社会を目指していくべきです。国や県、市町村には率先して就労の場を確保してもらいたいものです。

理事　高橋　典成

グループホーム便り

それぞれの空白に

グループホームは利用者にとって安らかな家庭のようでありたいと願っている。けれど現実は、買い物に口出しすることもあれば、たばこやお酒を控えてもらうこともある。帰省の望みを家族との調整でとどめることもある。勿論意味もなく我慢を強いるはずもないが、「大草原の小さな家」のような暖かさには程遠い。ふと気づけば「○○さんの心からの笑顔をしばらく見ていないなぁ。」と。

この夏、二十数年ぶりに母と再会した利用者がいる。ホームに戻った彼の顔には今まで見たこともないような穏やかな笑顔。日々の暮らしの中でささくれ立った彼の心と、周囲から我が身を守ろうとする鎧は、一泊二日の再会で氷解したようだった。

グループホームのルールに当てはめようと誰かの暮らしを変えたり、満たされない思いを別の何かで補おうとする小さな企ては徒労に終わることも多い。気づかぬうちに、支援する側も、箱庭の中で納まりのよい解決の糸口を探そうとする。だが、彼の心の空白は、「母」以外の別の何かでは埋めることはできなかったのだ。誰もが満たされない部分を抱えている。それぞれの空白にぴたりと合ったピースを見つけることは本当に難しい。そのピースを見つけたご褒美が「利用者の笑顔」ということだろうか。

高橋　順子

利用者の笑顔が一番のご褒美

施設長敬白

今年の夏、話題をさらった尾畠春夫さん。軽ワゴン車に食料や水、寝袋を積み込み、助ける側からいっさい力を借りないことが信条で「自己完結するのが真のボランティアだ」「決して〝してやる〟ではなく、〝させていただく〟の気持ちで私は臨んでいます」と尾畠さんは語っています。「かけた情けは水に流せ、受けた恩は石に刻め」尾畠さんの座右の銘は心に響きます。

「『自慢傲慢バカがする』が北野家の訓え」と教えてくれたのは、以前同じ職場だった北野大先生。「けしからん！」と世の不正に今も声を大にするのは元記者で現場の第一線で走り回った当法人の理事長、ここは東京・青山通りかと勘違いさせるほど自由に闊歩する元ミッションスクール元英語教諭の相談役（理事長夫人）、そして厳しい助言を寄せてくださる理事や監事の皆さん。元気な先輩の方々に囲まれているせいか、あと半年で70歳を迎えることも忘れさせてくれます。

施設長　石川　紀文

編集後記

高齢者、障がい者、子供。「元気一番館」が、制度の縦割りを崩すきっかけになればと思います。

高橋　和也